

比喩に関する一考察

芹 澤 剛

- 一 はじめに
- 二 言語形式からの分類
- 三 『羅生門』『蜜柑』『歯車』の比喩
- 四 三作品の比較
- 五 まとめ

私達をとりまいてゐる個々の事物・事象のすべてが固有の名称を持つならば、伝達時に生じる誤解は極めて少なくなるだろう。しかし、実際には対応する名称を持たない事物・事象の多いことは言うまでもない。

例えば、「昨日、私は公園で犬を見た。」という場合の「イヌ」を相手（受容主体）に伝えるためには、まず「イヌ」という言語形式を用いるしか方法がない。もちろん、この概念化、一般化された「イヌ」で十分に目的の達せられることもある。しかし、その特定の「イヌ」自体の在り方といったものの伝達を意図するならば、この「イヌ」という言語形式による表現の不十分であることは否めない。そこで、より具体的にするために「耳の垂れた」、「足の長

い、「体は黒く、尾の先だけ白い」というような修飾語句を付ける。それでも、どのように「耳」が「垂れ」ているのか、どの程度「足」が「長い」のか、といったことについては受容主体の恣意的解釈に委ねられる。表現主体の経験したハイヌVを精確に受容主体に伝達するためには、数限りない修飾語を用いなければならず、なお不十分である。

具体的事物であるハイヌVを表現する場合でさえこのような状況にあるのだから、心的状態などの抽象的事象の場合などは、精確さを持たせようとすること自体に無理があるように思えてしまう。

そこで私達は受容主体のイメージに訴える方法の一つとして比喩を用いる。

・ 猟犬のような犬が、人間のよう**に**じっとこちらをながめていた。

・ まるで狼とみのような犬だ。

(佐藤春夫『田園の憂鬱』)

・ すばらしい富籤とみを引き当てたかのように、溢れる喜びを押しかくすことができなくて……

(立野信之『軍隊病』)

比喩は、或るものとAを、別のものとBに喩えるという表現法である。構造的には、対象Aを表すのに、それと対応する言語形式aを用いなくて、別の対象Bと対応する言語形式bとを臨時的に結び付けるものである。

「何を(所喩) 何に(能喩) 喩えるのか」ということにおいて、とりわけ問題になるのが能喩の選択である。能喩は表現主体によって自由に選ばれるという性格を持つためである。そこには対象へ向かう表現主体の視点、対象からの意味のとり方などが反映される。このような点から、比喩が文体の研究や、それを通しての表現主体の研究に用いられることがある。また表現主体が、対象をどのように捉え、別のどのようなものと結び付けることによって、そこにどういった意味を読みとっているのかという、創造された新しい意味の発見として比喩を考えることもできる。

本稿では、以上のような文体論、作家論への方法としての比喩の考察や比喩の意味論的な考察の、前段階に位置付

けられるものとして、比喩の言語形式的側面を考えてみたい。対象とする言語作品に芥川龍之介『羅生門』、『蜜柑』『歯車』を取り上げ、これら三作品に現れた比喩を、主として言語形式の面から検討し、その特徴を考えると、比喩という表現法の一側面を見ることにしたい。

さて、文学作品に出現した比喩を考察の対象とする場合、まず問題になるのは、どのようなものを比喩として認定するかということである。比喩の認定範囲は用例採集者の考えによって大きな違いが生じる。言語そのものが比喩的性格を持つとする立場では極めて広い認定範囲が設けられるであろうし、慣用的表現との関わりで、陳腐なもの以外は、独創的なものだけを認めるならば、認定範囲は狭小化されることになる。また、修辭学的分類による諷喩を積極的に認める立場になれば、非常に多くの表現がその範囲に含まれてくる。さらに表現主体の意識⁴⁾を考慮し、厳密に比喩を考えるとすると、その表現が本当に比喩なのか断定できない場合が生じてくる。

そこで本稿では、基本的に受容主体の立場からの考察とし、筆者にとって比喩と思われるものだけを取り上げることにする。対象の限定と用例採集の基準を以下に示しておく。

○比喩としての特徴がその形態面に現れる直喩を考察の対象とする。従って、以後「比喩」という名称は直喩を指す。

○例えば「AはBのようだ」という表現で、実際にはAはBではないという事実性否定の意識が読み取れること。

すなわち、Aという事物・事象をBという別の事物・事象に喩えている、という表現主体の意識が、受容主体である筆者に読み取れるものでなければならぬ。

○比較的慣用化しているものも広く取り上げる。

一一

採集した用例はすべて「ようだ」「みたいだ」などの比喩であることを明示する表示語（説明語）を持つ。この表示語のとり形式（活用形）により、比喩の表現形式は異なる。

例えば「ようだ」の場合を考えてみると、

I BのようにC A (例) 氷のように冷たい心

II BのようなA (例) 氷のような心

III AはBのようだ (例) 心は氷のようだ

というような形式をとりうる⁽⁶⁾。

表示語とそれの上接する部分全体を文の成分として考察するとともに、これらの表現形式に必要な構成要素に注目したい。

I型は連用修飾成分を形成し、そこには被修飾成分が必要である。つまりI型は「BのようにC A」という形式を構成する、A・B・Cの三要素が必要となる。II型は連体修飾成分を形成し、被修飾成分としてAが必要で、A・Bの二要素で構成される。またIII型は述語成分を形成し、やはりA・B二要素で構成される。

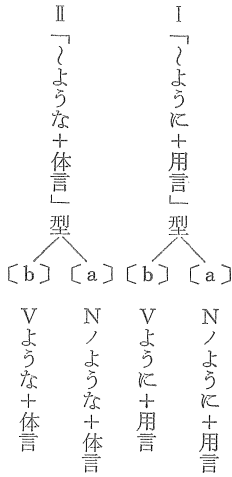
さてI型「BのようにC A」の例で、Cに相当するのは「冷たい」である。これは表現主体が所喩「心」と能喩「氷」とを結び付けた根拠になっていると考えられる。受容主体の側では、「なぜ『氷』と『心』が結び付けられたのか」を理解する上での、表現主体からの説明として受け取ることができる。もちろん「冷たい」ということだけが、表現主体の側で「氷」と「心」を結びつけたとは限らないが、「冷たい」が最も大きな根拠になっていると考え

することはできるだろう。表現主体の独創的な発想から生まれた比喩の場合には、受容主体にとって、この根拠の明示、受容主体への表現主体からの説明としてのCは、その比喩を理解する上で、重要な意味を持つ。

このような所喩と能喩とを結び付けた根拠の説明としての構成要素は、Ⅱ型・Ⅲ型には基本形式上必要とされない。ところで、本稿で取り上げる芥川龍之介は比喩を比較的多用する作家と考えられる⁹⁾。比喩を多用する作家は、それをほとんど用いない作家と比べて、比喩に対する表現上の価値の置き方がより大きいと考えられ、それだけに陳腐なものより斬新なものが多いと思われる。しかし斬新であればあるほど受容主体の理解の範囲を越える可能性が高い。受容主体が正確に表現過程を把握し、辿ることができるように、表現主体は指標となるものを提示する。

そして、こういった場合の表現に形式的に最も適すると思われるのがⅠ型ではないだろうか。しかし他の形式を用いて表現することも十分可能である。或る事柄を表現するのに形式を選択する。あるいは独自の形式を作り出す。このようなところに表現主体である作家の比喩使用の特徴の一つが見られるだろう。

さて、このような表現形式の特徴を中心に考察するために芥川の『羅生門』『蜜柑』『歯車』に用いられた比喩を、表示語の言語形式から次のように分類した。Nは名詞、Vは動詞を表している。



分類した各作品の比喩を検討してゆくことにしたい。

三

採集した比喩は、『羅生門』十八例、『蜜柑』十例、『齒車』二十九例である。これらを各型別にまとめると表1のようになる。

I 「～ように＋用言」型

この型に類型化されるものは、『羅生門』十三例、『蜜柑』四例、『齒車』二十五例である。

[a] 「Nノように＋用言」

I型をさらに下位分類した場合、この[a]型に含まれるものは『羅生門』七例、『蜜柑』一例、『齒車』十八例である。

① 羅生門の楼の上へ出る、幅の広い梯子の中段に、一人の男が、猫のように身をちぢめて、息を殺しながら、上の容子ようすを窺うかがっていた。
〔羅生門〕

② 暮色を帯びた町はずれの踏切りと、小鳥のように声を挙げた三人の子供たちと、……
〔蜜柑〕

型		作品		羅生門			蜜柑		齒車		計
		a	b	7	13	1	4	18	25		
I	～ように＋用言	a	Nノように＋用言	7	13	1	4	18	25	42	
		b	Vように＋用言	6		3		7			
II	～ような＋体言	a	Nノような＋体言	3	5	1	6	3	3	14	
		b	Vような＋体言	2		5		0			
III	～ようだ			0		0		1		1	
計				18		10		29		57	

表 1

③彼は丁度獅子のように白い頬髯を伸ばした老人だった。

(『齒車』)

この型は「NVように十用言」という形式を短縮したものと考えられる。①では「猫が身をちぢめるように(一人の男が)身をちぢめて」、②では「小鳥が声を上げるように声を上げた三人の子供たち」、③では「獅子が鬚を伸ばしているように頬髯を伸ばした老人」のように考えられる。しかし、表現上、冗長感は免れない。そのため省略、簡潔化される。

なお、①では「猫のように」が、「身をちぢめて」だけではなく「息を殺しながら」「上の容子を窺っていた」までを修飾し、各々の動作・状態に「猫」のイメージを重ねていると考えられることも十分可能である。また、②は「小鳥」の声の挙げ方との間に類似性を見出した表現である。例えば、餌を見つけて巣に戻って来た親鳥を見て、小鳥達が申し合わせたように一斉に声を上げる、そのような声の挙げ方を思い描くことができる。そして、声の挙げ方と同じ時に、声そのものも「小鳥」のイメージの中で捉えることになるだろう。

(b) 「Vように十用言」

この型に分類されるものは『羅生門』六例、『蜜柑』三例、『齒車』七例である。

④(下人は)そうして一足前へ出ると、不意に右の手を面頬おもてほから離して、老婆の襟上むすねをつかみながら、嚙みつくよううにこう云った。

(『羅生門』)

⑤私は一切がくだらなくなつて、読みかけた夕刊を抛り出すと、又窓枠に頭をもた寄せながら、死んだように眼をつぶつて、うつらうつらし始めた。

(『蜜柑』)

⑥この鉢のあたりへ来ると、どの雀も皆言い合わせたように一度に空中へ逃げのぼって行った。

(『齒車』)

この型では、「嚙みつくように」、「死んだように」、「言い合わせたように」などの比較的慣用化されたものが多

い。
 何が何に喩えられているのか、つまり所喩と能喩との関係を考えてみると、前の「a型」「Nノように十用言」とは異なった点のあることがわかる。例えば、①と⑤を比較してみよう。

①は、「一人の男」が身をちぢめる動作、また身をちぢめている状態を、「猫」のそれに喩えたものであり、これは「一人の男」と「猫」という全く別物を比較している。しかし⑤は、「私」の「眼をつぶって」いるその状態を、同じその人間の別の状態、「死んだ」状態を想定して喩えている。つまり①は二つの主体が存在し、各々の動作・状態を同一視するものであるが、⑤では一つの主体の異種の状態を同一視するのである。⑤と同様の型に類型化されるものの場合、喩えている或る状態(能喩)を否定した形で、喩えられている状態(所喩)を理解することができる。⑤では、能喩である「死んだ」という状態を否定した形の「死んではない」という状態を所喩として理解することができるだろう。

また、この型に含めたもので④⑤⑥と異なる例として次の⑦のような、「ように」が受身の形になった動詞に接続する場合がある。このような場合は行為者が「誰か」というような不特定の形で表されることが多い。

⑦けれども誰かに押されるように立ち止まることさえ容易ではなかった。 (「歯車」)

⑧(老婆は)それから、今まで眺めていた死骸の首に両手をかけると、丁度、猿の親が猿の子の虱をとるように、
 その長い髪の毛を一本ずつ抜きはじめた。 (「羅生門」)

これは「猿の親が猿の子の虱をとる」という様子に喩えたもので、「老婆」の様子と「猿の親」の様子という全く別の物を比較している。構造的には「a型」に近いものである。

II 「ノような十体言」型

この型に入れられるものは、『羅生門』五例、『蜜柑』六例、『歯車』三例である。

〔a〕 「Nノような+体言」

Ⅱ型の下位分類として、この〔a〕型に含まれるものは『羅生門』三例、『蜜柑』一例、『齒車』三例で、『齒車』では「〜に似た」「〜に近い」「〜らしい」という表示語を使用している。

⑨ 下人の眼は、その時、はじめてその死骸の中に蹲すくまっている人間を見た。檜皮色ひわだの着物を着た、背の低い瘦やせた、白髪頭しらげの、猿のような老婆である。〔羅生門〕

⑩ 私の頭の中には云いようのない疲労と倦怠けんたいとが、まるで雪曇りの空のようなどんよりした影を落していた。

〔蜜柑〕

⑪ 廊下は僕にはホテルよりも監獄らしい感じを与えるものだった。

〔齒車〕

この型は、対象についての細かな観察、分析によって想起されたものを用いたというより、直観的に連想されたものを持ち出した、というようなものが多い。

⑨では、「死骸の中に蹲すくまっている」「老婆」を詳細に分析した結果、見出された属性などから「猿」を得たのではなく、その「老婆」を見て瞬間的に「猿」が想起されたのであろう。「なぜ『猿』が思い浮んだのか」ということを自問することによって「老婆」が客観視されることになる。⑪の場合も同様であろう。「廊下」の雰囲気、「ホテル」というよりもむしろ「監獄」のそれに近いとするのであるが、「どのようなところが、そのように思わせるのか」という点については、実際そのように感じた後の分析によって具体的になつてくるのであろう。⑩は「疲労と倦怠」が「私の頭の中」に落した「影」を「雪曇りの空」に喩えたものである。比較の根拠の明示として「どんよりした」という部分を受け取ることができる。しかし、この箇所が仮に添えられていない「雪曇りの空のような影」という形であっても、その「影」の在り方というものは察することができる。その意味では、この比喩を理解する上で不可欠な

ものではなく、補足的なものとして受け取ることになるだろう。

〔b〕 「Vような十体言」

この型に分類されるものは、『羅生門』二例、『蜜柑』五例で、『齒車』にはこの型のものはない。

⑫その時、その喉から、鴉の啼くような声あゑが喘あゑぎ、喘あゑぎ、下人の耳へ伝わって来た。〔羅生門〕

⑬一本ずつ眼をくぎって行くブラットフォオムの柱、置き忘れたような運水車、それから車内の誰かに祝儀の札を云っている赤帽……〔蜜柑〕

『羅生門』に現れるこの型の比喩は二例とも「Vのような声」という形式で用いられている。各々、動詞には対応する主体が上接している。つまり、この場合は「NVのような十体言」という形式をとっていることになる。しかし⑬では、このような形式で捉え直すことは困難である。「置き忘れる」という動作の主体は見当らず、あえて想定するとしても、「誰かが」というような不特定のものにせざるを得ない。むしろこの場合は、「誰が」というようなことは考える必要がなく、「置き忘れられた」というような漠然とした状態を思い描けばそれで十分であり、また自然であるだろう。

III 「〜ようだ」型

この型に類型化されるものは、次の『齒車』で用いられたもの一例だけである。表示語は「〜にそっくりだ」が使用されている。

⑭それらの紙屑は光の加減か、いずれも薔薇ばらの花にそっくりだった。〔齒車〕

この例は、II型a)「Nノような十体言」の場合と同じように、直観的に「紙屑」を見て「薔薇」を思い描いたのだ

と思われ、それを表現したものであろう。この型は基本的に、所喩と能喩とを関係づける根拠の明示として受け取れる部分を構成要素として必要としない。そして、「Aというものを見て、直観的に（その類似性から）Bが思い浮んだ」という表現主体の認識・判断を、各型の中で最も直截的に表現化したと考えられるのがこの型だろう。

四

本節では、三作品の比喩を比較し、その特徴を考えてみることにしたい。

安本氏の調査結果⁽⁶⁾をもとに百人の作家の比喩出現率を算出した。その平均は、四百字詰原稿用紙約一・一枚に比喩一例が出現するという結果になった。『羅生門』『蜜柑』『歯車』各作品（全量）についても同様にして算出すると、各々約〇・九枚、〇・八枚、二・六枚に比喩一例が出現するということになり、『歯車』では比喩の出現率が大きく低下している。百人の作家の比喩出現率と比較してみると、『羅生門』『蜜柑』は出現率が高い。

表1から三作品の比喩を比較してみると、共通してⅠ型「くように十用言」やⅡ型「くような十体言」の多いことがわかる。Ⅲ型「くようだ」の言い切る形式で比喩が用いられているのは一例に過ぎない。とりわけⅠ型「くように十用言」という連用修飾機能を持たせているものが多い。

このように「くようだ」型の表現に比して、「くように」型、「くような」型の表現が多いことについては、本稿で使用した用例数の少なさから断定はできない。他の言語作品をさらに調査し、同様の結果が得られれば、比喩は全ての形式が同じように使用されるのではなく、特定の形式がよく用いられるという、使用に関する傾向が提示できるように思う。

次に三作品の比喩の相違点を考えてみることにする。

表1から三作品のI型の合計は四十二例で、II型は十四例、III型は一例である。三作品を全体として考えた場合の、I型とII型の用例数の割合は三対一になる。『羅生門』のI型対II型は二・六対一で、全体の割合に近い数字である。しかし『蜜柑』では、I型対II型が一对一・五になり、逆転する。『歯車』では、I型対II型は約八・三対一になり、I型の割合が非常に大きくなっているものの、I型がII型より多くなっているという点では『羅生門』と『歯車』の比喩は同じような傾向にあるものとして考えることができる。

I型、II型を下位分類したa型とb型との比較からも次のようなことが考えられる。

I型について各作品のa型対b型を比べてみると、『羅生門』ではa型の方がわずかではあるが多く、『蜜柑』では逆にb型の方が多い。そして『歯車』では再びa型の方が多くなっている。II型についても同様である。『羅生門』ではa型が、『蜜柑』ではb型が、そして『歯車』ではa型が多くなっている。この点においても、『羅生門』と『歯車』の比喩は同じような傾向にあるものと考えることができる。そして、これらと全く逆の傾向にあるのが『蜜柑』の比喩であると考えられる。要するに、次のように言うことができるだろう。

『羅生門』において、芥川の比喩は「～ように十用言」の形式をとって現れることが多い。さらには、「ように」「ような」は「動詞」よりも「名詞ノ」に承接することの方がわずかではあるが多い。この二つの点について他の作品を比較してみると、『蜜柑』においては、これと異なる傾向が見られる。ここでは「～ような十体言」の形式をとることが多くなる。そして、「ように」「ような」は「名詞ノ」よりも「動詞」に承接することが多い。『歯車』においては、『蜜柑』での傾向は見られなくなり、『羅生門』と同様の傾向が見られる。しかも、その傾向は『羅生門』の場合と比較すると、やや強くなっているようである。

考察の対象とした比喩の数が極めて少ないことから、これら三作品から芥川の比喩の全容を知ることにはできない。従って、以上のような傾向を、各作品のものとしてではなく、芥川の比喩の傾向として考えることは難しいが、

今後の調査、研究の上での仮説、問題点の提示として位置付けておきたい。

五

以上、本稿において述べてきたことをまとめておくことにしたい。

まず、或る事柄の伝達に際し受容主体の理解を深める方法の一つとして比喩があることを述べた。比喩は、文体論や作家論に応用されたり、新しい意味の創造として意味論的にも考察の対象となる。しかしまた、方法としての比喩を考へることとは別に、「比喩とは何か」という根本的な問題がある。

そこで本稿では、芥川の『羅生門』『蜜柑』『齒車』という三つの作品に現れる比喩の中で直喩を取り上げ、表示語の言語形式からの表現の類型化を行った。そして分類した芥川の三作品の例を通して、比喩の言語形式的側面と、芥川の三作品に現れた比喩の特徴を考へてみた。

その結果、芥川の三作品に用いられた比喩に限って言えば、各表現型が大差なく同じ程度に現れるのではなく、著しく偏る傾向が見られた。「くように」型が最も多く、「くようだ」型は極めて少ない。この点については、さらに数多くの用例を調査することで、比喩の表現形式の特徴の一つとして見なすことができるかもしれない。

また、三作品の比較から、末期に成った『齒車』において比喩の使用率の低下が見られる。比喩を多用する作家は、それだけ比喩に対して表現上の価値を持たせ、そこに独創性を発揮しようとするものと予想される。この点において芥川の晩年の内的状態が比喩使用の減少という表現面での変化と関係づけて考へることができれば、表現主体の心理状態の表現への反映という興味深いテーマも得られるだろう。

先学のご叱正を願う次第である。

注(1) ハイヌ√は指示物、「イヌ」は言語形式を表す。

(2) 喩えるもの、喩えられるもの、各々に付される名称はさまざまである。本稿で用いた「能喩」「所喩」以外には、「喩義」「本義」、「喩詞」「被喩詞」というようなものがある。

(3) 本稿では、旧仮名づかいを現代仮名づかいに改めた新潮文庫本をテキストとして用いた。本研究においては性質上、許容されるものと考ええる。「蜜柑」「歯車」についても同様である。

(4) 表現主体の明確な「喩える」という意識を指す。

(5) 未然形「ようだろ」、仮定形「ようなら」は、推量表現や仮定表現などと截然とした区別ができない点があるので本稿では除外した。

(6) 安本美典氏は、現代作家百人の口語体小説百篇を対象に直喩の出現数を調査している（全量調査ではなく、四百字詰原稿用紙約三十枚分に現れる数）。芥川の場合は『地獄変』が取り上げられ、出現数の多い順に並べた場合、百篇中二十六番の位置にある。『文章心理学入門』（Ⅲ文章の性格学 2 文章特性の調査）。

〔主な参考文献〕

P・ギロー『意味論—ことばの意味—』佐藤信夫訳（昭三三、白水社）

安本美典『文章心理学入門』（昭四〇、誠信書房）

S・ウルマン『言語と意味』池上嘉彦訳（昭四四、大修館書店）

外山滋比古『比喩の伝達論』（『言語生活』二〇八、昭四四、筑摩書房）

中村明『比喩表現の理論と分類』（昭五一、秀英出版）

池上嘉彦『意味の世界 現代言語学から視る。』（昭五三、日本放送出版協会）

金岡孝『比喩について』（『論集日本語研究 8 文章文体』昭五四、有精堂）

橘豊『比喩小考』（同右）

甲斐睦朗『源氏物語と枕草子の比喩』（『日本語学』四一六、昭六〇・6 明治書院）

M・ブラック『隠喩』尼ヶ崎彬訳（『創造のレトリック』昭六一、頤章書房）